

(9) 空襲におびえた人々

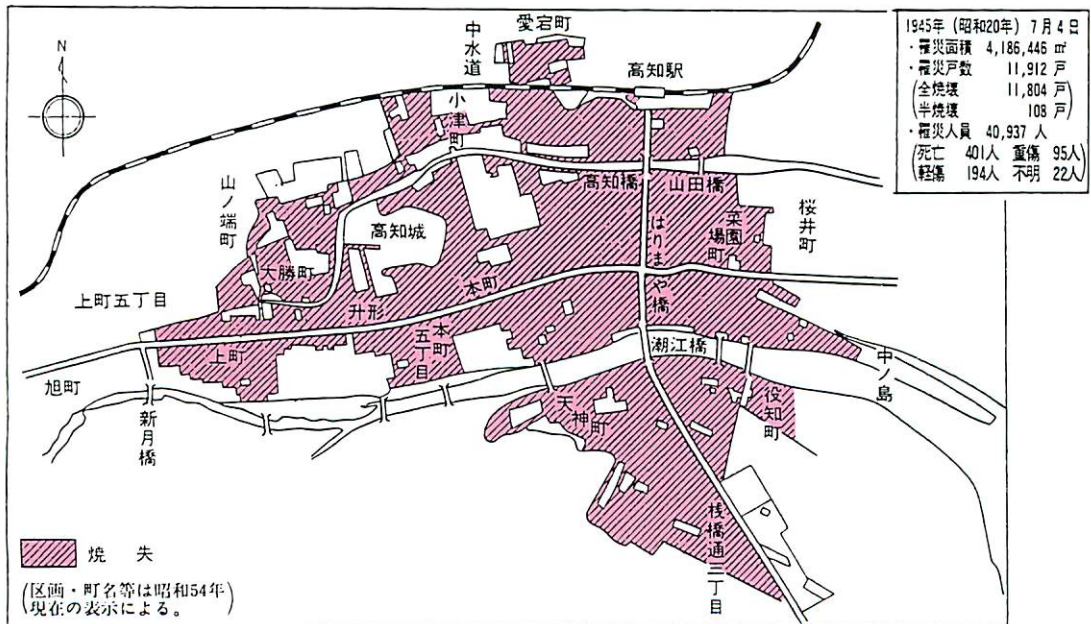
高知の空襲 1945（昭和20）年にはいと、高知県も空襲を受けるようになりました。どの家でも防空ごうがつくられ、学校や町内、職場では防空ごうなどへの避難訓練をくり返すようになりました。灯火管制もきびしくしました。県内への空襲はこの年323回にもおよんでいます。

7月4日午前1時頃、後免町の一部や高知市ではB29、120機余りが無数の爆弾を落とし、高知市は焼土となりました。

多数の犠牲者を出し、被災者4万人余りと記録されています。食糧の確保、敵の四国上陸のデマがとびかうなど人々は不安な毎日を死とむかいあいながら送っていました。

8月15日、連合国に無条件降伏をして、長かった戦争が終わりました。死地にあった人々はすべてよみがえったのです。

〈高知市空襲による焼失図〉（昭和20年7月4日）（高知市資料）



爆弾で右手を失った坂本喜美枝さん

何が落ちて来たか解りません。百石町の田の道から山の方へ行っておりましたら、急に空気がなんとも言えんように振動して来ました。妙に気持ちが悪く、これは普通ではないと思って私はさっとしゃがみ込みました。それから、防空頭巾すきんの上に火を消す為にバケツを持っていつも歩いていましたからそれをかぶりしました。そうしたら、大風が吹いた後のようになり、本当に電気にかかったように身体がビリビリ、ビリビリと前後に揺れました。その時、手は切れている時だったと思いますが私は気が付きません。本当にひっくり返るようにゆれました。それは短い間でした。



それから元のように静かになりましたから、立ち上がりました。そうしたら、かぶっていたバケツが飛んでそれを取ろうとして、三回も四回もうつむいては取ろうとし、うつむいては取ろうとしましたが、目の前がてんにあるバケツは取れません。どうしても合点がてんがいけないと思って、今度は左手で取りました。右手がのいていたのでも知りませんので合点がいけないと思いました。

山手の方は危険だと言うので、川の方へ歩いて行きました。そうしたら、向こうの方に白い物が見えます。何か危険な物のようでこわいと思って恐る恐る近寄ってみました。むこうの物は動きませんので、そっと拾いあげてみたら五本の指がパーと開いた手でした。そこで私が気がつきました。自分の手と言う事を。それで自分の右肩を見ましたら右手がなかったのです。それで拾った手が右手でしょう。こりゃ自分の手だと思ってもうびっくりしてその場につきすわりました。

それから、その右手を抱きひつつくものならひつつきたいと思ってバケツに入れて川の方へ行きました。

道の縁ふちに手を入れたなりのバケツを置き必死で川にもぐり込みました。流されないように左手で橋げたを持って一生懸命で夜の明けるのを待ちました。その間の時間はかなり長いように感じました。空襲解除の時には、くたびれてよう歩かんようになっていました。

それからが大変でした。解除になって皆が集まって来ましたが、家も庭木も全部焼けて久武さんのリヤカーだけ残っていました。

◎終戦はむかえたが…… 飛行場から北方およそ7km離れたところに陣山（長岡小校区）という地区があります。戦争のころ、ここには、軍の送信所がつくられていました。送信所の北の山には、送信用の無線機などを敵からかくすために作られた巨大な壕（全長230m）があります。送信所跡は、現在、田畑にかわり、当時の様子が見られるものは、炊事用井戸（現在は、ビニルハウス内にあり、野菜用の井戸として利用されている）ぐらいです。

戦後、不用となった銃や爆弾を、この地に集め、中の火薬を取り出し、処理していました。1945（昭和20）年11月19日、高く積まれた火薬の山に、何かの手ちがいで火がついたのです。山は、大爆発をおこし、炎が空高く舞い上がりました。この爆発により、近くの住民の家にも大きな被害がでました。全焼5戸、全壊4戸で、合計1700戸が被害を受けました。戦争が終わった後も、戦争による被害は、このような形でも続いたのです。

南さんの話…… 私の家のすぐ西側で爆発が起こった。戦車を攻撃する箱爆弾に火が入ったかららしい。火薬の焼却の作業で、大量にくべ過ぎて、大きな火になり、大爆発になった。パンパンはじきだして、これは大ごとだと思って、家族をみんな防空ごうへ入れた。そのとたん大爆発した。私の父は、飛んできた箱が当たって少しけがをした。火災現場の西には送信所の建物があったので、爆風や破片はほとんど東へ行った。私の家は全焼した。わらぐろもいくつか焼けた。1000発の小銃弾が入った箱が飛んできた。

砲弾が次々と爆発し、破片が飛んでくるので、全く外へも出られなかった。まる一日爆発が続いた。うちは丸焼けになったので、しばらくテント生活だった。家を建てようにも木はない、瓦はない、職人はおらん、金もない。百姓は米を持っていたので、米と交換で生活用品を手に入れた。苦労はしたが、命さえあれば、なんとかなるものだ。しかし、しばらくは、田に入る前に破片を拾い出すのに苦労した。破片で足を切った人も多かった。

小松さんの話…… 私は当時、送信所から約2キロ北方の久礼田小学校の5年生だった。その時は運動場で全校朝礼をしていた。運動場は校舎の南側にあるので、私たち生徒は北向きに、すなわち校舎の方を向いて、校長先生のお話を聞いていた。すると大爆発のすごい音がして、同時に私たちの目の前で、校舎の窓ガラスが全部こわれて落ちてきた。それはすごかった。どうしてあんな爆発が起こったのか、ずっと不思議に思っていたが、今ここで、発掘調査の作業をしていて、当時の砲弾が出てきて、50年前の爆発のいきさつが分かって、ようやく納得できた。

陣山壕の中



ビニルハウス内にある井戸

